

トルコで一万年の歴史を掘る—アナトリア考古学研究所の活動—

大村 幸弘*

Pioneer Seminar: Excavations in Turkey-Activities of the Anatolian Archaeological Institute

Sachihiro OMURA

本稿は2021年3月6日(土)、サンシャインシティ文化会館にて開催された日本西アジア考古学会『パイオニアセミナー』の記録をもとに、編集委員会が編集したものです。

『西アジア考古学』23号編集委員会

はじめに

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所の大村です。中近東文化センターは東京三鷹の国際基督教大学の隣にある古代中近東の研究を行う施設です。三笠宮崇仁親王殿下(以後、三笠宮様)が1979年に設立されました。1973年に、三笠宮様が中心となり佐藤栄作さん、石坂泰三さん、出光興産の出光佐三さんらの協力で研究所を起ち上げるという話が持ち上がり、1979年に三笠佐三さんの全面的な協力により中近東文化センターの建物が出来上がり、その中には図書館や博物館も設置されたわけです。1998年には中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所がトルコ共和国のアナトリア高原の真ん中に設立され、私はそこで研究活動を行っています。

トルコへの留学

私は、1972年の9月にトルコ共和国のアンカラ大学言語・歴史・地理学部(以後、文学部)、ヒッタイト学科に留学しました(写真1)。トルコ政府の給費留学生として留学したのですが、一緒に留学したのがオスマン史を研究されている鈴木董先生とトルコ語を研究されている勝田茂先生でした。鉄と軽戦車のヒッ

タイト帝国を発掘したいというのが、留学をした理由でしたが、最初の段階では非常に苦労しました。トルコ語も英語もできませんでしたし、アンカラ大学に留学したからといって、当然のこととしてすぐに発掘現場に行けるわけがなかったのです。発掘現場にも行けず、考古学も一体どうやって研究していいのかわからない状況でした。日本でいろいろな本を読んだつもりでしたが、あまり役に立たず暗中模索の時期が大分続きました。

その年の10月に大学の授業が始まりましたが、何をやっていいのか本当のところ手繰りの状態でした。そのようななかで、よく学生が授業の前に大学のキャンティンでお茶を飲んで話をしていました。私は黙って皆の話を聞くだけで、それを通して少しずつですがトルコ語を覚えることから始めました。ただ、当初、留学期間は1年間だったため、その短い期間の中でヒッタイトの発掘現場に行くのは夢のまた夢だとすぐに分かりました。いろいろ協力してくれていたシャーヒンという古典考古学科の学生から、発掘現場の話を紹介されたのはキャンティンだったと記憶しています。参加することを決めたのはいいのですが、向かおうとしている遺跡についてはほとんど何も情報を持ち合わせておりませんでした。その遺跡が、東アナトリアのエラズーにあることぐらいしかわかっていませんでした。



写真1 アンカラ大学(当時)

ハラバ遺跡の発掘調査

ユーフラテス川の上流を堰き止めてケバンダムを造るという大プロジェクトが、トルコでは1950年代後半に浮上していました。東アナトリアを開発することを目的にユーフラテス河の上流にあたるフラット川を堰き止めダムを造ることが計画されたのです。ダム建設と並行する形で、1965年にアンカラにある中東工科大学が中心となってダムの人工湖になる地域の分布調査が開始されました。その結果、多くの遺跡がこのダム湖に沈むことが明らかとなったのです。私が参加

*中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所

Japanese Institute of Anatolian Archaeology, The Middle Eastern Culture Center

西アジア考古学 第23号 2022年 167-175頁 ©日本西アジア考古学会

したハラバ (Haraba) 遺跡はその一つだったのです。その遺跡では、1969 年からアンカラ大学の古典考古学科のバーキー (Baki Ögün) 先生が発掘調査をしており、シャーヒンはバーキー先生の学生だったのです。本当のところ私はハラバ遺跡について何も知らないまま発掘現場に入ったようなものです。

ハラバ遺跡で発掘していたのはヘレニズム時代、紀元前 3 世紀ぐらいの城塞の一部でした。これが本当にヘレニズム時代のものなのかも分からないまま、一生懸命発掘をしたことは覚えています。この調査に参加した当初は、言葉が出来なかったこともあったのでしょう。バーキー先生たちが何を目的にして調査しているのか、初めのうちはさっぱり分かりませんでした。私は、ヒッタイト帝国時代の遺跡を発掘したいと思っていたのですが、たまたまハラバ遺跡から赤色の磨研土器が出土したことがあります。博物館で見たヒッタイトの土器に似ていましたので、ヒッタイトのものかと思ったのですが、そうではありませんでした。今から 2800 年くらい前に東アナトリアにウラルトゥという王国があったのですが、それはウラルトゥ王国時代の土器でした。

ウラルトゥ王国の墓の発掘

この調査がきっかけとなり、バーキー先生からもっと東の方で調査するから来ないかと、お誘いを受けました。なんでも勉強しなくてはと思っておりましてので、先生についていくことにしました。そこではウラルトゥの墓が、広大な高原に無数に分布していました。近隣の村人がここで盗掘をしているという話が大学にも漏れ伝わり、その一つを発掘することになりました。墓の多くは盗掘を受けていましたが、中には未盗掘のものもありました。

この墓のそばにはクルド人の村がありました。あと



写真 2 パトノス遺跡で。兵隊に見守られる発掘現場

から知ったことですが、誰が遺跡のことを漏らしたのか村の中で言い争いになり、大変なことになるそうです。パトノス (Patnos) というところで発掘をしたのですが、村での争いで発掘ができなくなることを先生は考えたようで、パトノスの軍の駐屯地に要請し、兵隊に守ってもらいながら発掘したことを覚えています (写真 2)。そのときに兵隊たちから銃を構えているところを撮ってくれと頼まれたので、写真を撮り、さしあげた記憶があります。ただ、ここがクルド人の村で、トルコ人とは歴史的にいろいろと問題を抱えていることをそれほど知らないまま調査に参加していたと思います。

私は、現場では日本語でメモを書いていた。また、私と先生しかカメラを持っていなかったので、写真を撮るときも堂々と撮影しました。メモが日本語なので、「これは、なんだ」とクルド人、トルコ人が話しかけてきました。私はクルド人とも親しくなり、クルド人の村を訪れ、夕食やお昼にも呼ばれるようになりました。その結果、トルコ人の隊員に私がスパイ行為をしているのではないかと疑われ、苦労したものです。

ただ、こうした経験は、後にカマン・カレホユック (Kaman-Kalehöyük) で調査をするにあたり、非常に役に立ったと思います。クルドの村人とトルコ人の隊員の方々には、本当に感謝したい気持ちです。その時は密告されたりするなど、いろいろ苦労はありましたが、今思えば、この経験があったからこそ、トルコで長く調査を継続できたのだと思います。

コンヤ・カラホユック遺跡の発掘調査

中央アナトリアにはメブラナという旋舞教団で有名なコンヤという町があります。そこにカラホユック (Karahöyük) という遺跡があります。アンカラ大学ヒッタイト学科のセダット・アルプ (Sedat Alp) 先生が発掘していたアッシリア商業植民地時代の遺跡で、ここの発掘調査に 9 年ぐらい参加しました (写真 3)。ここは典型的なトルコ人の町であり、イスラーム色の強い町でもあります。

この現場でも、いろいろなことを学ばせていただきました。セダット先生は文献学者で文字を中心に研究されていたので、文字資料が出土することを期待されていました。先生はほとんど発掘現場には出てこられなかったのですが、現場から私たちが帰ってくると、我々が文字資料を見つけたのか、毎日、非常に気にしていました。この経験も、のちに自分で調査をする際の一つの踏み台になったと思います。先生は、毎日、キャンプで粘土板を解読されていて、新しい発見があると夕食の時にいろいろとお話しして下さり、その話が非常に面白かったことを覚えています。



写真3 カラホユック遺跡の発掘現場

カラホユックはアッシリア商業植民地時代の遺跡です。メソポタミアから入ってきたアッシリア商人の影響を強く受けていました。アッシリア商人は、メソポタミアから金、銀、銅を求めてアナトリアに来ていました。カールム（Karum）と呼ばれる自分たちの居留区を作り、地域の権力者と交流をしていました。アッシリア商人は、メソポタミアからは錫を運んでいます。これが切っ掛けとなりアナトリアは本格的な青銅器時代が始まります。アッシリア商人がアナトリアへやってきた4000年ぐらい前のことです。アッシリア商人が入ってきてコンヤ・カラホユックにも一つの拠点を築いたものと思います。しかし、残念なことに今までのところ商人の居留区は確認されていません。

コルジュテペ遺跡の発掘調査

私が発掘に参加した4つ目の遺跡が、コルジュテペ（Korucutepe）遺跡です。この遺跡は、最初に発掘調査に参加したハラバ遺跡のすぐそばにありました。アメリカのシカゴ大学が1968年から発掘をしていましたが、許可なく印影や印章などを持ち出したという理由で、1971年にトルコ考古局によって発掘調査権を剥奪されていました。その後、アンカラ大学文学部のヒッタイト学科が調査を再開した遺跡です。

コルジュテペ遺跡もケバンダム的人工湖に沈む予定でした。私は近くのハラバ遺跡の調査に参加していたのですが、当時は恥ずかしながらコルジュテペ遺跡がヒッタイトの重要拠点であることも知りませんでした。ハラバ遺跡の調査の休みを利用して、コルジュテペ遺跡を訪れる機会があり、コルジュテペ遺跡の隊長や隊員からヒッタイトの建築遺構や出土した印影を見せてもらいました。ヒッタイトを研究したいと思っていたのに、ハラバ遺跡のすぐそばにヒッタイト帝国のコルジュテペ遺跡があることも知らなかったのですから、研究を行えるような資質など全くないとしみじみ

思いました。私はハラバ遺跡のキャンプのベッドの上で胡坐をかいて、もう辞めたほうがいいかなとも思いましたし、日本へ戻ろうと真剣に思いました。何の勉強もせずに、トルコにきて考古学を学びたいと言っていたのですから当然と言えば当然のことです。こんな不勉強で、このような世界でやっていけるわけがないとも思いました。

しかし、コルジュテペでヒッタイトの遺跡を見たときに、強く惹きつけられるものがありました。そこで、発掘隊長のハイリー・エルテム（Hayri Ertem）先生に直接、調査隊に入れてくれないかと頼み込み翌年から隊員として参加することになりました。それから3年間、遺跡が水没するギリギリまで発掘を行いました。

最初、私は、ハイリー先生やシカゴ大学のH. G. ギュータボック（Güterbock）先生が、なぜこの遺跡を発掘調査していたのか、わかっていませんでした。しかし、彼らの報告書などを読むなかでその目的が次第にわかってきました。ハイリー先生もギュータボック先生もどちらも文献学者で、コルジュテペ遺跡はヒッタイト帝国時代の拠点イシュワ（Isuwa）だという仮説を持っていたのです。特にギュータボック先生は、一つの印影からそのような仮説を考え、遺跡を発掘していたようです。ギュータボック先生がコルジュテペのそばのエラズーの考古学博物館でヒッタイト帝国時代の印影を読んでいる姿は今でも鮮明に脳裏に残っています。何か鬼気迫るものがありました。

この遺跡では、中央に南北にのびる5m×200mぐらいのトレンチが設置されていました。1968年、1969年のシーズンに入れたものだと思います。このトレンチの入れ方には本当に驚きました。遺跡を真つ二つに切るようなトレンチでしたので、トレンチとはこんなに大胆に入れるものかと感心したものです。この遺跡の中にどのような文化層が眠っているのか、3年間徹底的に発掘しました。水没する前のコルジュテペ遺跡では城塞も掘りました。鉄が1970年代の私の研究テーマでしたが、ヒッタイト帝国時代の城砦でトルコ人の隊員が発見し、それが一つの切っ掛けとなりヒッタイトの鉄を追うことになります。最初は、「ヒッタイトの人が、本当に鉄を持っていたのか？」という単純な疑問からこの研究テーマに入りました。強い火災層の跡も城砦で確認することができました。この火災層も、後の私の研究テーマにプラスになりました。

発掘の途中でケバンダムが完成し、貯水が開始した時は不安なものでした。ケバンダム的人工湖が日一日と大きくなり、遺跡は人工湖ですっかり囲まれてしまいました（写真4）。小舟で遺跡に通わざるを得なくなりましたし、遺跡は人工湖の水をぐんぐん



写真4 ダム湖に沈むコルジュテペ遺跡

と吸い込みましたので、発掘区でも一番深いところはいつの間にかドロドロになってしまい発掘は出来なくなりました。

最終的には遺跡の発掘を断念せざるを得ませんでした。この遺跡は1975年の5月に水没したのですが、ハイリー先生は最後まで発掘を諦めませんでした。先生は粘土板を見つけ、このコルジュテペ遺跡が、かつて何と呼ばれていたのか解明したかったのです。

発掘中にずいぶん写真を撮りました。査察官やトルコ人の隊員から、「なぜ発掘現場でしょっちゅう写真を撮るんだ、なぜクルド人を撮影するんだ。勝手に撮影などするな」と言われ、ずいぶんトルコ人の隊員とぶつかりました。私はトルコ人やクルド人の慣習を知らないまま、失礼なことをいっぱいしていたと思うのですが、遺跡の見張りをしてくれたクルド人のニメット（Nimet）さんは「こんなことをしては駄目だよ。そんなことではトルコ人とぶつかるだけだ」と、いろいろ教えてくれました。今から思えば、良い勉強をさせてもらったと感じています。他の国に入って調査するとき、郷に入れば郷に従わなければいけないことがたくさんあります。そんなこともコルジュテペ遺跡の発掘調査を通じて教わりました。

カマン・カレホユック遺跡への誘い

カマン・カレホユック遺跡で調査を始める前、1970年代から1980年代初頭にかけての時期は、トルコ国内でいろいろな発掘現場をまわり歩いた時期でした。そして、将来、自分で調査を行うのであれば、どんな形の調査をすべきかを、徐々に考えるようになりました。初めから自分で発掘調査を始める気持ちがあったかと言えば、そんな気持ちはありませんでしたし、最初から理想として、こういうことをしたいと思っていたわけではありませんでした。ただ、いくつかの発掘

調査に参加しているうちに、もしいつの日か自分に発掘調査をはじめるチャンスが与えられるのならば、こんなことをやってみたいと考えるようになりました。

1981年に中近東文化センターに戻りました。私がはじめて中近東文化センターの理事会に出席した際に三笠宮様から、「何か今後行いたいことがありますか」と話を振られたのには驚きました。私は、「とにかく発掘調査を行いたいです」と、素直に自分の気持ちをお答えしたのを覚えています。他に何が出来るわけでもありませんでしたので、そう答えたのだと思います。そして、三笠宮様から「どこで発掘をしたいのですか」というご質問に、「トルコでも中央アナトリアで発掘を行うことができれば」とお答えしたと記憶しています。

そして、私は1982年にトルコに戻ることになりました。この時、一番私を支えてくれたのが、キュルテペ（Kultepe）の隊長であったタフシン・オズギュッチ（Tahsin Özgüç）先生（以後オズギュッチ先生）でした（写真5）。私は日本に帰国する際には、先生に挨拶に行ったのですが、先生からは「日本に帰って何をやるのだ。発掘調査をやるのであれば早くトルコに戻ってこい」と言われ感激したものです。そして、「いつでも戻ってこい。そして発掘を開始すればいい。それが君の一生の仕事だよ」と、仰って下さいました。私がトルコにいる間にいろいろな発掘現場を回っていたことを御存じだったようです。この先生の励ましが私をまたアナトリアへ戻してくれたものと思います。

私が実際にトルコに戻ると、「では、発掘だな」と、即座にオズギュッチ先生が仰って下さったのは本当に嬉しいことでした。私はそれまでいろいろな発掘現場を見てきましたが、何を基準にして発掘調査をして良いか、わかりませんでした。先生は「一つ基本を置くことが大事だよ」と、アドバイスをして下さいました。



写真5 オズギュッチ先生（右）と筆者（中央）

私は文化編年の構築を基本としてやってみたいとは思っていましたが、それが出来るものかとは思っていませんでした。アナトリアの多くの遺跡は、ホユック (Höyük)、フユック (Hüyük)、テペ (Tepe)、カレ (Kale)、オレン (Ören)、ヒサル (Hisar)、テル (Tell) とよばれ丘状をなしています。この丘状の遺跡には、何千年もの歴史が文化層となって積み重なっています。先生は、これを上から丹念に掘り下げていけば良いと考えていたと思います。それから私は、先生にシリアの国境辺りや西のエスキシェヒル、北部地域の可能性を尋ねましたが、いずれも駄目。しかも、私が「では、どこで発掘をすれば良いですか」と質問しても、先生はなかなかお答え下さいませんでした。

そして、先生はある日、ようやくカマン・カレホユック遺跡を勧めてくださいました。正直なことをお話しておきますが、この遺跡は私に対して勧めて下さった遺跡ではないと思っています。あくまで先生が中近東文化センターの三笠宮様にお勧めした遺跡だったと思います。ただ、当初、私はあまり嬉しそうな顔をしなかったのではないかと思います。

なぜかという、カマン・カレホユック遺跡は、首都のアンカラと先生の発掘現場のキュルテペのちょうど中間にあるからです。だから先生が現場に行く時や、現場からの帰りに遺跡に立ち寄り、私にいろいろと口を出されるのではないかと思います。辞めようかなとも思ったぐらいです。私の気持ちを先生は読んでいたのでしょう。「やりたくないならば辞めてもいいよ」とも言われました。先生がせっかく三笠宮様に差し出して下さった遺跡でしたので、私がとやかく言える立場ではありません。推薦して下さったカマン・カレホユックを三笠宮様にお伝えして、この遺跡で発掘することに決まりました。先生はこの遺跡は、トルコ政府として三笠宮様に差し上げたものとお考えでした。私は今でもそう思っています。

カマン・カレホユック遺跡の発掘調査

カマン・カレホユック遺跡は、直径が 280 m、高さが 16 m ぐらいあります。アナトリアでは中規模のものです。遺跡の中には、1 万年はいかないにしても、かなり長い時間の文化層が堆積しています。カマン・カレホユックには三つの発掘区があります。「文化編年の構築」を行っている北区、北区で確認した鉄器時代、中期・後期青銅器時代の集落の形態を把握するための南区、それと城砦区です (写真 6)。北区の方で上から下に少しずつ掘り下げていき、文化編年の構築を行っています。欧米の研究機関は、どこもやっていることです。他の研究者が構築した文化編年を用いて

研究すれば良いのではないかとよく言われました。でも、自分で文化編年を構築したことがありませんでしたので、一度それをやってみたいと思っていました。自分できちんとした尺度を持つべきだというのが、私の考えでしたが、生意気な考えだったと思います。そう易々と出来るものではないのは発掘調査を開始して数年で理解出来るようになりました。ただ、引き返すことなどは出来ませんでした。

「10 年間で終わります」と、三笠宮様にお話をしましたが、もう発掘を始めて 36 年経っていて、まだ半分も終わっていません。三笠宮様の白寿のお祝いの際に、「発掘は、あと何年ほどかかりますか」とご下問がありましたので、「少なくともあと 70 年にかかるかと思っています」とお答えしました。本当はまだまだかかると思っていますが。

私は、丁寧に上から掘り下げていって、文化編年が完成したら私の仕事は終わりだと思って発掘をしてきました。やっと、前期青銅器時代の 4300~4400 年前の層まで掘り下げました。しかし、まだ何千年という層が下の方に続いています。おそらく 4500~4600 年前の層に達したぐらいで、私自身の研究は終わるかなと思っています。

次の世代の人たちが、さらに掘り下げていかなければなりません。文化編年が完成したら、中央アナトリアの研究をする上で非常に役に立つ資料になると思いますし、これを基準にさまざまな問題を解明できる資料になると考えています。ただ、この作業は 5 年や 10 年では終わらないでしょう。

「文化編年の構築」は、遺跡を上から丹念に掘り下げながら、出土した遺物を整理して、基準を作る作業です。第 I 層の時代には、こういった遺物が出土し、こういった遺物が一つの基準になりますと、一つ一つ組み立てていくことです。例えば、第 II 層の鉄器時代の層から見つかった象牙の印章は 2800 年ぐらい前の



写真 6 カマン・カレホユック遺跡



写真7 象牙製獅子型スタンプ印象

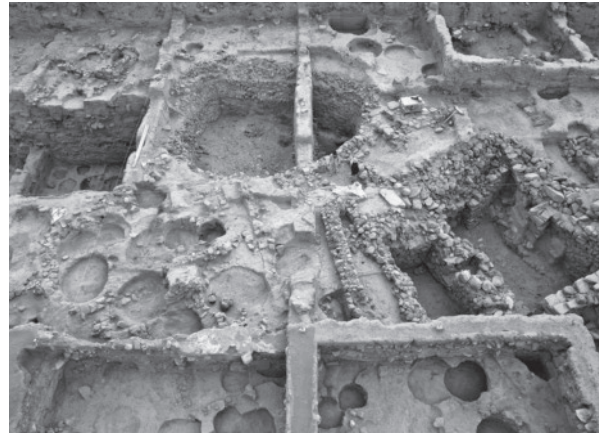


写真8 大貯蔵庫（ヒッタイト帝国時代）

ものです（写真7）。これも一つの標準遺物になります。第Ⅲ層からは直径15m、深さが6mぐらいの石組みの大貯蔵庫が見つかりました（写真8）。ヒッタイト帝国時代に穀物が納められていた貯蔵庫で、その中からは印影もたくさん出土しています（写真9）。ヒッタイト帝国の終焉を考える上でも、大型の穀物貯蔵庫は非常に重要な意味を持っています。これと同様の大型の穀物貯蔵庫は、同時期のヒッタイト帝国の都ボアズキョイ（Boğazköy）遺跡からもたくさん確認されています。

第Ⅲ層の最下層からは、アッシリア商業植民地時代の大火災層も見つかりました。ここから大量の人骨が出土しました（写真10）。この人骨を発見した時、アイスマン（Iceman）の研究グループから声をかけられたことがあります。ただ、当時、日本人のグループが人骨を研究していましたのでアイスマンのグループとの研究は実現しませんでした。これまで人骨は70体以上出土していますが、なかには人の脳がカラカラに乾燥して残っているものもありました。一瞬にして

焼けたようです。黒くなった人骨も数多く出土したのですが、かなりの戦闘があったのだと思います。

このほかに、周辺からはときに金製品も出土します。あるときトルコのデイリー・ニューズという英字新聞の記者が来たときに、私が「金銀はあんまり出ない方がいい。あまり出てくると、そちらに引っ張られてしまうからね」とお答えし、大笑いしたことを覚えています。金製品などが幾つも出土するとどうしてもそれらに惹きつけられて発掘調査自体が雑になることもありますので、新聞記者にはそう答えたのだと思います。

カマン・カレホック遺跡の文化編年がきれいに出来上がってくると、一つの基準が見えてきます。すると、今まで言われてきたことが完全にひっくり返るようなことが幾つも見えてきます。ただ、「文化編年の構築」には、ものすごく時間がかかるのです。自分だけでは完成させることは出来ませんので、若手を育てていかなければいけない。だから、アナトリア考古学研究所の考古学のフィールドコースで、日本とトルコの若手を育てているわけです。

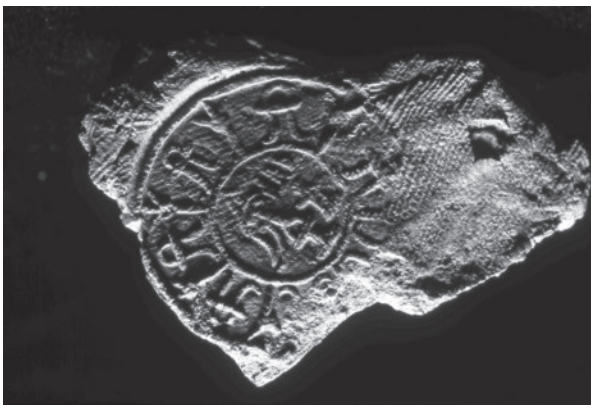


写真9 大貯蔵庫から検出された印影



写真10 大火災層（アッシリア商業植民地時代）から出土した人骨

遺跡のマネージメント

発掘では上から丹念に掘り下げていきます。2~3 cm ずつ掘り下げていっては、出土したものを箱に入れていきます。そして、村の女の子たちがそれを分類・整理をして、収蔵庫に納めていきます。分類してもらうためには、女の子たちをトレーニングする必要があります（写真 11）。しかし、ただトレーニングするだけではなく、考古学が面白いことを本気で伝える必要があります。このような授業を研究所で繰り返すことによりはじめて彼女らも必死になって整理してくれるようになるのです。彼らを発掘調査、研究の補助的に使うのでは、彼らの方もこちらの姿勢を即座に読めます。ですから、発掘調査、研究には無駄ではないかと思われるほど、彼らには時間を割くようにしています。

この中から学校や大学に行ってみたいという子がたくさん出てきて、今、村はとんでもなく進学率が高くなっています。ただ、大学を出たからと言ってカマン・カレホユック遺跡の発掘現場に戻ってくるかというと、誰も戻ってきません。残念ですけど、それはしょうがないことです。彼らにとっては発掘だけでは生活にならないことを知っているのでしょう。

私たちは収蔵庫を四つも五つも作りました（写真 12）。いろんな発掘現場を見てきましたが、論文や報告書、または学会発表には、遺物の一部しか利用されないのは事実です。ほかの遺物はどうなっているのかというと、私が見てきた現場では、ほとんど廃棄されていました。99.9%が廃棄されていたかと思います。しかし、廃棄するような遺物も並べてみると、当時の市井の人びとの文化や生活を見ることができます。だから、遺物を捨ててはいけませんが、そうした遺物を保管するとなるととんでもないことになります。その体制をつくることだけでも大変なことです。

ここまでのアナトリア考古学研究所の体制を作り上げる上では、研究者の力はあまりにも小さいものでほと

んどないに等しいと思います。やはり三笠宮様、そのあとを継いで下さった寛仁親王殿下、彬子女王殿下がおいでだったからこそ出来たのだと思います。また、出光興産が本当に全面的に応援してくださらなかったら途中で頓挫していたことは間違いありません。特に、出光美術館の出光昭介理事長が影になり日向になり応援して下さったことには感謝の言葉も見つかりません。発掘調査を行いながら、いつも考えているのは現在行っている発掘調査、研究をどのようにして社会に還元するかです。簡単に言えばどうやったら多くの人たちに考古学を理解してもらえるかです。アナトリア考古学、中近東考古学をやっても誰一人も振り向いてくれるはずもないと私などは時折自虐的に思いますが、振り向いてもらうにはやはり発掘調査を行っている私が一生懸命、社会に対してあらゆる機会を使いながら語り続けることが大事なことではないかと思います。

遺跡保存について

もう一つ私は、遺跡の保存のことでいつも悩んでいます。出土した遺物を整理して資料として使えるようにすることは絶対に必要だと思っている一方で、発掘調査をしている遺跡を守らなければならないことです。これは最終的に、住友財団さんに長期間に渡って援助して頂いており遺跡保存の雛形の一つを作らせて頂いたと思っています。

発掘調査を行っている遺跡を保護するというのは大変難しい問題を数多く抱えています。出土した建築遺構をどのような形で守ればいいのかということです。遺跡は発掘しない方が永久保存にも繋がると考える研究者もいます。それもある意味では一理あるように見えますが、それでは研究は頓挫しかねません。発掘調査を行えば必ず遺物、建築遺構などが顔を出してきます。

この保存は、トルコの文化・観光省が遺跡を最終的



写真 11 土器片の分類・整理事業



写真 12 現地研究所の収蔵庫



写真 13 カマン・カレホユック考古学博物館（正面入口）



写真 14 博物館見学にきた子どもたちへ遺跡模型の前で解説

に管理することになりますので、それに任せるのが通例となっていますが、発掘調査を行っている研究者が関わらなくてもいいのかとなると私は決してそうだとは思っていません。やはり発掘調査に関わっている研究者にも遺跡保存の一端を担う義務があるのではないかと思います。

カマン・カレホユックでは、この問題を発掘開始と同時に取り上げ、遺跡保存に色々な対策を取ってきました。最終的には発掘区に一時的にしる保護屋根をかけることが最も重要だと考えています。その基本として保護屋根を作る上では、地元で容易に入手できる資材を使うこととしてきています。ただ、ここで大きな問題は、保護屋根を作る上では資材としてかなりの木材が必要であり、その木材が現地では驚くほどの値段であり、とてもそれを賄えるだけの予算もなく思案にくれてしまいます。保護屋根のための木材をカマンで購入するとすると、径 50 cm のポプラ 1 本で 3 万円から 4 万円もします。40~50 本購入しただけで、ゆうに 200 万円はかかります。そこで、1988 年に遺跡の周辺に 2000 本以上のポプラの苗木を植え成長を待つことにしました。今では見事に成長し、毎年 30~40 本くらい伐採して屋根の製材として使っています。

社会還元をどうするか

しかし、まだ私は大きな忘れ物をしています。村の人たちや地域の人たちへの還元です。遺跡から何が出てきたのか、彼らは知りたいわけです。やはり博物館を作るべきだと、発掘を始めて数年してから考えるようになりました。地域の人々は、遺跡から何が見つかったかにとっても興味を持っています。博物館を作り、そこに出土遺物を陳列すると何が遺跡から見つかったかが一目瞭然です。ただ、博物館をカマンに建設することに対して、最初はトルコ側も大賛成してい

たわけではありませんでした。どちらかという反対の声の方が強かったように思います。

日本の外務省の ODA による文化無償援助でカマン・カレホユック考古学博物館は建設することができましたが、これもやはり最終的にはトルコの文化・観光省、そして地元の協力があって出来上がったものだと思います。

2010 年に彬子女王殿下やエルトゥールル文化・観光大臣とともに、博物館のオープニングを迎えることが出来ました。今ではトルコの地方博物館の中で最も入館者数の多い博物館になっています。博物館はカマン・カレホユックと同様にテペ状のものを作りました（写真 13）。

自分たちは発掘調査、研究を行ってきましたが、研究だけでは遺跡の調査は進まなくなるものです。発掘した遺物をどうするのか、一緒に働いてきた人たちの生活をどうするのか、継続性のある体制を作るのはどうするのか、これは本当に難しい問題です。そう容易に出来るとは思いません。何も研究を行っている者が関わることなどないのかもしれませんが、ただ、継続性のある研究を行う上ではどうしても避けて通ることの出来ないものです。

博物館は、ものすごい入館者でいつも賑わっています。本当に素晴らしいものを作って下さったと思います。カッパドキアはすぐそばにあるのですが、他にあまり見学する場所がないのでしょうか。土曜日、日曜日になると家族連れなど本当に多数の人たちが来館しています。私はよく博物館で解説することにしています（写真 14）。一番やらなければいけないのは、子供たちへの教育だと思っています。子供たちに、なぜ発掘をしているのか、これが子供たちとどのような結びつきがあるのか、本当に一生懸命教えなければいけません。また、私たちは、村の子供たちや労働者の子供たち向けに、毎週土曜日に授業を行っています。発掘

現場のウスタ（熟練の労働者で少なくとも 30 年近く発掘調査に関わっている）も、若い子たちに一生懸命教えてくれています。このほかに、日本の学生向けに考古学のフィールドコースを行っていますし、遊びに来た日本の子供たちには発掘体験をしてもらっています。これも許可をとるのが大変なのです。

このように子供たちや若い子たちへの教育は本当に大変で、時間もかかります。だから、研究者の誰もがやるべきことだとは思ってはいません。しかし、やはり子供たちには、発掘調査の面白さを伝えてあげたいと思っていますし、そうやって次の世代を育てていくことが大事だと思っています。

トルコ政府から、カマン・カレホック遺跡周辺の何千坪もの土地を自由に使ってくださいと言われ、そのプロジェクトを立ちあげているところです。やはり研究していく上で、地域に活動を理解していただく必要があります。また、若手が出てこなければ、私たちの活動も終わってしまうわけです。それを行う上で施設が必要になり、アナトリア考古学研究所の建設も始まりました。そのプロジェクトを 1989 年に三笠宮様にお伝えして、2001 年からは寛仁親王殿下が建設募金活動を行ってくださいました。1993 年には 5 年間もかけた三笠宮記念庭園も建設させて頂きました。これも研究にはそれほど関係のなかったことのようにも思えますし、カマンから離れた研究者もありました。一昨年は 13 万人もの来園者がありました。おそらく昨年、コロナがなければ来園者の数は 15 万人に達したのではないかとと思っています。

アナトリア考古学研究所（写真 15）は、カマン・カレホック考古学博物館と三笠宮記念庭園、そして

遺跡が一体となった複合施設です。研究所のオープニングにはエルドアン首相（当時、現在は大統領）もお出でになりました。

オズギュッチ先生の存在は大きく、先生がいてくれたおかげで、私は道を外すことなく、ひたすらこのような仕事を継続できたと思っています。本当に心から感謝しています。よくヨーロッパの研究者からは、先生のカバン持ちだと言われたものです。それほどいつも先生の側にいましたし、教えを乞うていました。先生が亡くなってから、もう 15 年以上経ちましたが、私は今でも先生のカバン持ちをやっているようなものです。

また、私は、村の人たちにも感謝しなければならないと思っています。年に一回退職者の集まりがあります。お亡くなりになった方もおりますが、この方々がいたので、今までやってくることができたと思っています。

私はこれまで研究所や博物館、日本庭園建設など、色々な活動にかかわってきました。研究を行うことが研究者の生業ですので、当然のこととしてそれを先ず行わなければなりません。しかし、それを継続して安定した形で続けていくとなると地元の人たちの協力なくしては不可能だと思います。如何に色々な施設を作ったとしても、研究者は地元の一部の場所をお借りして調査、研究をしていること、つまり彼らが私たちを置いて下さっていることを忘れてはならないと思います。その意識が欠けてしまうと調査はなかなかスムーズにいかなくなります。私は、発掘調査、研究を行う上で、研究全体のマネジメントが最も大事なことではないかなと思っています。今日は、大分話が長くなってしまいましたので、この辺で終わりにしたいと思います。どうも有り難うございました。



写真 15 アナトリア考古学研究所（右）と三笠宮記念庭園（手前）、カマン・カレホック考古学博物館（左側、台形状の建物）

